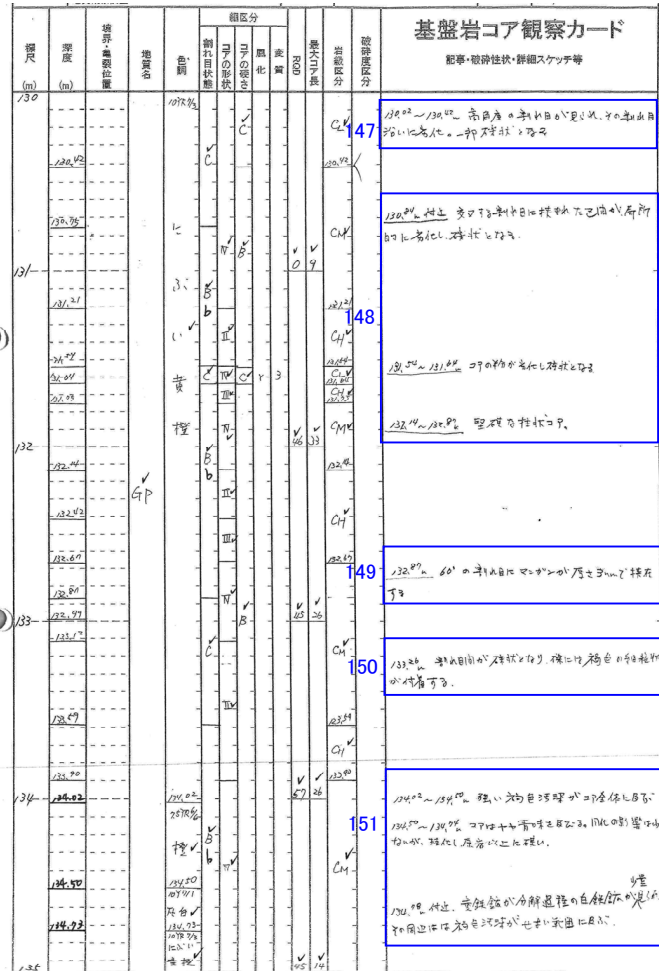


H27-B-4

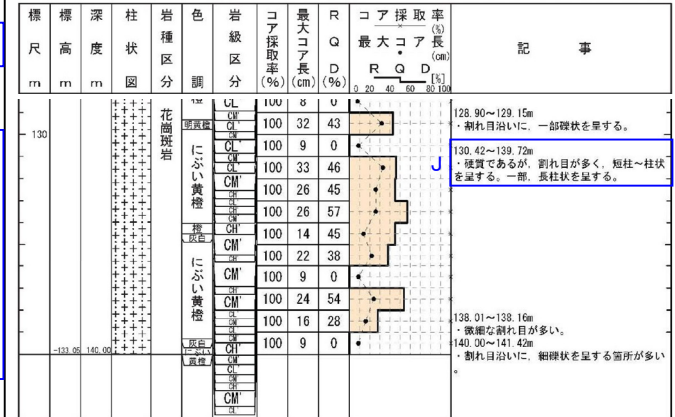
コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容
147 130.02~130.42m 高角度の割れ目が見られ、その割れ目沿いに劣化。一部礫状となる
148 130.84m付近 交差する割れ目に挟まれた区間が局部的に劣化し、礫状となる。 131.54~131.64m コアの半分が劣化し礫状となる 132.14~132.87m 堅硬な柱状コア。
149 132.87m 60°の割れ目にマンガンが厚さ3mmで狭在する
150 133.26m 割れ目間が礫状となり、礫には褐色の細粒物が付着する。
151 134.02~134.50m 強い褐色汚染がコア全体に及ぶ 134.50~134.74m コアはやや青味を及ぼす。風化の影響は少ないが、珪化し、原岩以上に硬い。 134.78m付近、黄鉄鉱が分解過程の白鉄鉱が少量見られその周辺には褐色汚染がせまい範囲に及ぶ。



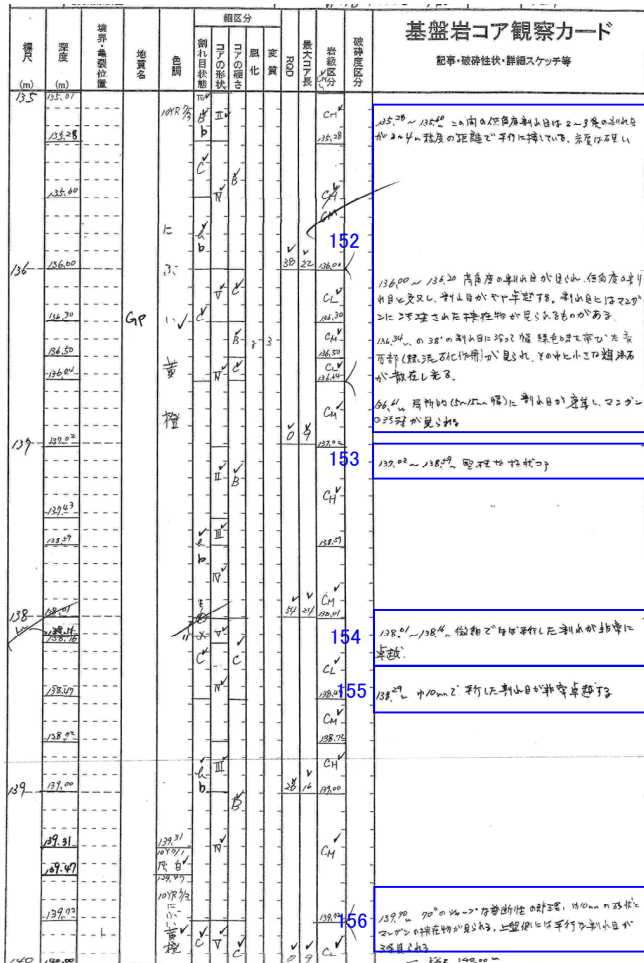
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
147	・一部割れ目沿いに礫状を呈するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
J	・“コアの硬さ”欄に基づき硬質，“コアの形状”欄に基づき短柱状~柱状、一部、長柱状と記載。
148	・一部で礫状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
149	・割れ目沿いのマンガンの狭在については、補足的なものであるため削除。
150	・礫状化し、礫に細粒物が付着するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
151	・色調、鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。

H27-B-4

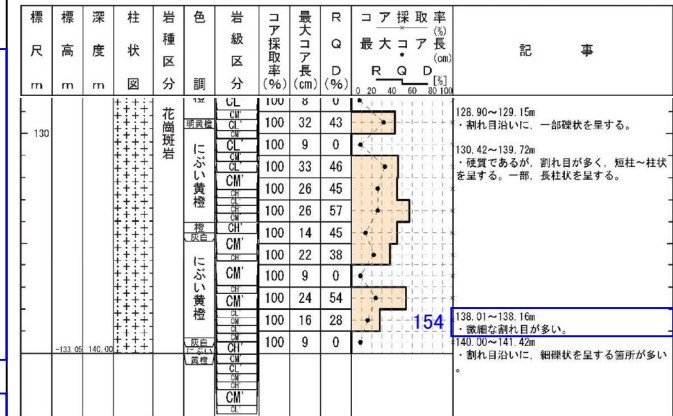
コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容
135.28～135.60m この間の低角度割れ目は2～3条の割れ目が2～4m程度の距離で平行に接している。岩質は硬い
136.00～136.20 高角度の割れ目が見られ、低角度の割れ目と交叉し、割れ目がやや卓越する。割れ目にはマンガンに汚染された狭在物が見られるものがある。 136.34mの38°の割れ目に沿って幅緑色味を帯びた変質部(緑泥石化作用)が見られ、その中に小さな輝沸石が散在し光る。 136.61m 局所的(5～15mm幅)に割れ目が密集し、マンガンの汚染が見られる
137.02～138.59m 堅硬な柱状コア
138.01～138.16m 微細でほぼ平行した割れ目が非常に卓越
138.29m 巾10mmで平行した割れ目が非常に卓越する
139.90m 70°のシャープな剪断性の節理、巾10mmの砂状とマンガンの狭在物が見られる。上盤側には平行な割れ目が3条見られる 検尺 140.00m



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
152	・色調、鉱物の晶出、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
153	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
154	・割れ目が平行との記載については、補足的なものであるため削除。
155	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
156	・砂を挟在し、剪断性の節理との記載があるが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・マンガンの挟在については、補足的なものであるため削除。

H27-B-4

コア観察カード (H27年8月)

標尺 (m)	深度 (m)	換算 深度 (m)	柱状 位置	地質 記号	細区分				RQD	最大 コア長 (cm)	岩級 区分	発達 程度 区分	記事 番号	記事 内容
					割れ目 性状	割れ目 傾斜	割れ目 長さ	割れ目 間隔						
120												157	140.00~140.36m 40~50° のほぼ平行した割れ目が卓越する	
												158	140.0~141.42m 割れ目に沿って幾分劣化が見られ細礫状となる所が多い。	
141												159	141.00~141.43m 低角度を主体とした割れ目が卓越。一部亀甲状となる	
												159	141.68~142.50m 高角度のほぼ垂直の割れ目と、40~50° の割れ目が5~10cm間隔で交叉する。 142.1~142.35mにかけて割れ目の一部には厚さ2~15mmの砂状の狭在物が見られる 142.53m 50° の割れ目に厚さ10mmの細礫と砂が狭在する	
143													143.49~143.65 割れ目が卓越、割れ目に沿って劣化し所々細礫状となる。 143.65m~ 堅硬な柱状コア	

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
140.00~140.36m 40~50° のほぼ平行した割れ目が卓越する
140.0~141.42m 割れ目に沿って幾分劣化が見られ細礫状となる所が多い。
141.00~141.43m 低角度を主体とした割れ目が卓越。一部亀甲状となる
141.68~142.50m 高角度のほぼ垂直の割れ目と、40~50° の割れ目が5~10cm間隔で交叉する。 142.1~142.35mにかけて割れ目の一部には厚さ2~15mmの砂状の狭在物が見られる 142.53m 50° の割れ目に厚さ10mmの細礫と砂が狭在する
143.49~143.65 割れ目が卓越、割れ目に沿って劣化し所々細礫状となる。 143.65m~ 堅硬な柱状コア

申請書用柱状図

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア	最大	R	コア	記事
m	m	m	図	調	区分	採取率 (%)	コア長 (cm)	(%)	採取率 (%)	
130			花崗斑岩	CL	100	8	0			128.90~129.15m 割れ目沿いに、一部礫状を呈する。
				CM	100	32	43			130.42~139.72m 硬質であるが、割れ目が多く、短柱~柱状を呈する。一部、長柱状を呈する。
				CM	100	9	0			
				CM	100	33	46			
				CM	100	26	45			
				CM	100	26	57			
				CM	100	14	45			
				CM	100	22	38			
				CM	100	9	0			
				CM	100	24	54			
				CM	100	16	28			128.01~138.16m 微細な割れ目が多い。
				CM	100	9	0			140.00~141.42m 割れ目沿いに、細礫状を呈する箇所が多い。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
157	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。
158	・変更なし
159	・余掘り区間のため削除。

H27-D5-1

余白

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

標尺 (m)	深度 (m)	イメント・地層境界	マーカー 火山灰 土壌化石 不片	地質名	色調	堆積構造・特徴等
0.5	0.00			盛土	1	0.00~0.25m 表土、植物根含む。 0.25~1.02m 礫混じり砂(盛土) 0.25~0.42m 径2~4mmの炭質物片を含む 0.25~0.93m 径2~4mmの石英細礫を全体に含む 径5~50mmの花崗斑岩の垂角礫(クサリ礫)を含む。
1	0.82			盛土	2	0.82~0.93m 植物根混入。 0.93~1.02m 径2~4mmの炭化物片を含む (0.25~0.92mの層相と同じ)
1	1.02			シルト混じり砂	3	1.02~1.11m 径60mmの花崗斑岩の垂角礫を含む。
1	1.11			シルト混じり砂	4	1.11~1.30m シルト混じり砂 中粒砂主体、淘汰は良好
1	1.30			砂質シルト	4	1.30~1.41m 砂質シルト 径1~2mm石英粒子散在 上位層、下位層との境界は不規則

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
1 0.00~0.25m 表土、植物根含む。
0.25~1.02m 礫混じり砂(盛土)
0.25~0.42m 径2~4mmの炭質物片を含む
0.25~0.93m 径2~4mmの石英細礫を全体に含む
径6~50mmの花崗斑岩の垂角礫(クサリ礫)を含む。
0.82~0.93m 植物根混入
0.93~1.02m 径2~4mmの炭化物片を含む(0.25~0.92mの層相と同じ)
1.02~1.11m 礫混じり砂、径60mmの花崗斑岩の垂角礫を含む
3 1.11~1.30m シルト混じり砂
中粒砂主体、淘汰は良好
4 1.30~1.41m 砂質シルト 径1~2mm石英粒子散在
上位層、下位層との境界は不規則

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	最大コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	記事
0.5	0.00		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	0.00~1.02m ・盛土である。
	0.02		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	1.02~1.11m ・礫混じり砂である。
	1.11		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	1.11~1.30m ・シルト混じり砂である。
	1.30		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	1.30~1.41m ・砂質シルトである。
1	1.41		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	1.41~2.40m ・礫混じり砂である。
1	2.40		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	2.40~2.60m ・シルト混じり砂である。
1	2.60		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	2.60~2.84m ・砂礫である。
1	2.84		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	2.84~43.00m ・花崗斑岩である。
1	43.00		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	43.00~5.50m ・風化が進み、軟質化している。
1	5.05		盛土	黄褐色	CM	100	6	0		100	6	0	5.05~5.50m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
1,2	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
3	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
4	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	イベント 地層境界	スケッチ	マーカ 山脈 土質 土質 土質	地質名	色調	堆積構造・特徴等
2.5	2.40					5	1.91~2.40m 礫混じり砂 径2~10mmの石英礫 径10~14mmの花崗岩類の礫を含む 基質は中~粗粒砂 礫形状は垂円礫のものが多い礫率20~25% 1.50~1.54m 径4~6mm炭化物片含む 1.69~1.78m 礫少なくシルト混じり 2.06m 径15mm 炭化物片含む 2.28m 径1~5mm炭化物片含む
2.5	2.40					6	2.40~2.60m シルト混じり砂 中~粗粒砂 淘汰は不良
2.5	2.60					7	2.60~2.84m 砂礫 径2~5mmの石英粒子 径14~800mmの花崗斑岩の垂角礫を含む 礫率40% 基質は中~粗粒砂 径2~4mm炭化物片散在
2.5	2.84					8	下位の基盤の花崗斑岩とは 40° で接する 花崗斑岩の上面は褐色酸化鉄汚染

記事内容
1.41~2.40m 礫混じり砂 径2~10mmの石英礫 径10~14mmの花崗岩類の礫を含む 基質は中~粗粒砂 礫形状は垂円礫のものが多い礫率20~25% 1.50~1.54m 径4~6mm炭化物片含む 1.69~1.78m 礫少なくシルト混じり 2.06m 径15mm 炭化物片含む 2.28m 径1~5mm炭化物片含む
2.40~2.60m シルト混じり砂 中~粗粒砂 淘汰は不良
2.60~2.84m 砂礫 径2~5mmの石英粒子 径14~800mmの花崗斑岩の垂角礫を含む 礫率40% 基質は中~粗粒砂 径2~4mm炭化物片散在
下位の基盤の花崗斑岩とは 40° で接する 花崗斑岩の上面は褐色酸化鉄汚染

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R D (%)	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	記事
40	21	1.00	盛土	黄土		100					0.00~1.02m 盛土である。
40	19	1.00	埋積物	砂		100					1.02~1.11m 礫混じり砂である。
40	17	1.00	埋積物	シルト		100					1.11~1.30m シルト混じり砂である。
40	15	1.00	埋積物	砂		100					1.30~1.41m 質シルトである。
40	13	1.00	埋積物	砂		100					1.41~2.40m 礫混じり砂である。
40	11	1.00	埋積物	シルト		100					2.40~2.60m シルト混じり砂である。
40	9	1.00	埋積物	砂		100					2.60~2.84m 砂礫である。
40	7	1.00	埋積物	砂		100					2.84~4.00m 花崗斑岩である。
40	5	1.00	埋積物	砂		100					4.00~5.50m 風化が進み、軟質化している。
40	3	1.00	埋積物	砂		100					5.05~5.50m

スケッチ: 礫はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Qp, アブライトAp 等
境界 明瞭 --- 不明瞭 --- 亀裂は赤線, 角度, 赤線等

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
5	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
6	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
7	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
8	・地層境界の傾斜、酸化鉄汚染については、補足的なものであるため削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

標尺 (m)	深度 (m)	境界層別位置	地質名	調色	細区分						基盤岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等
					割れ目状況	コアの形状	風化	硬質	集じん	岩級区分	
0											
1											
2											
3	2.84										赤褐色の細粒砂質土・粘土 径2~5mmの石英、長石の斑晶を有する花崗斑岩 斑晶の含有率は5~7%
4	4.80										3.40~3.90m 割れ目面にフィルム状(1mm程度)のマンガンを含在する 3.80~4.00m コア肌荒く軟質 指で粒子取れる 4.10~4.15m 割れ目に2~4mmの石英を含在する
5	6.65										4.80~5.50m コア肌荒く軟質 指で粒子取れる

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
(着岩)
9 径2~5mmの石英、長石の斑晶を有する花崗斑岩 斑晶の含有率は5~7%
10 3.40~3.90m 割れ目面にフィルム状(1mm程度)のマンガンを含在する 3.80~4.00m コア肌荒く軟質 指で粒子取れる 4.10~4.15m 割れ目に2~4mmの石英を含在する
11 4.80~5.50m コア肌荒く軟質 指で粒子取れる

申請書用柱状図

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)		R Q D (%)	コア採取 率 (%)	記事
							R	Q			
46.21	1.00			盛土		100					0.00~1.02m 盛土である。
46.21	1.02			黄褐色シルト		100					1.02~1.11m 凝縮じり砂である。
46.21	1.11			黄褐色シルト		100					1.11~1.30m シルト混じり砂である。
46.21	1.30			黄褐色シルト	CM	100	6	0	*		1.30~1.41m 砂質シルトである。
46.21	1.41			黄褐色シルト	CL	100	4	0	*		1.41~2.40m 凝縮じり砂である。
46.21	2.40			黄褐色シルト	CL	100	3	0	*		2.40~2.60m シルト混じり砂である。
46.21	2.60			黄褐色シルト		100	3	0	*		2.60~2.84m 凝縮じり砂である。
46.21	2.84			灰白	CM	100	20	20	*		2.84~48.00m 花崗斑岩である。
46.21	4.80			灰白	CM	100	15	15	*		4.80~5.50m 風化が進み、軟質化している。
46.21	5.05			灰白	CM	100	11	11	*		5.05~5.50m 割れ目が多く、岩片状を呈する。
46.21	12.35			灰白	CM	100	14	14	*		12.35~12.70m 風化が進み、軟質化している。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
9	<ul style="list-style-type: none"> “地層名”欄に基づき、花崗斑岩とその深度区間を記載。 一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
10	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目沿いのマンガン、石英の挟在については、補足的なものであるため削除。 硬軟については岩級区分に含めて示しているため削除。
11	<ul style="list-style-type: none"> “風化”欄及び“コアの硬さ”欄に基づき、風化が進み、軟質化していると記載。
A	<ul style="list-style-type: none"> “コアの形状”欄に基づき、岩片状を呈する区間とその深度区間を記載。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

標尺 (m)	深度 (m)	境界位置	岩種	色調	細区分			最大コア長 (cm)	RQD	最大割れ目径 (mm)	割れ目性状	基盤岩コア観察カード	
					色調	割れ目性状	割れ目性状					記事番号	記事内容
5	5.00											12	5.04~5.08m 褐色強風化部 5.08~5.25m 割れ目沿いにマンガン濃集(汚染)顕著 コアは軟質 岩片状を呈する 5.40~5.50m 割れ目沿いにマンガン濃集顕著
6	6.00											13	5.80~5.95m 割れ目面はフィルム状(1mm程度)のマンガンを挟在する同方向の割れ目(45°~55°)密に発達 径2~5mmの石英、長石の斑晶の含有率は5~7% 6.45~6.55m 割れ目沿いにMnおよび酸化鉄を挟在する(1~4mm) 6.50~7.78m ピンク長石多い 7.35~7.80m 高角度(∠80°以上)の割れ目にMnをフィルム状(1mm程度)に挟在する。
7	7.00											14	7.80~8.32m 斑晶少なく、含有率は1%以下 構成鉱物は細粒
7	9.00											15	9.44m 割れ目の挟在物は幅6cmのチョコレート状粘土(半固結)
7	9.20											16	9.78m 割れ目の挟在物は幅4cmの砂混じり粘土(固結)

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
5.04~5.08m 褐色強風化部 5.08~5.25m 割れ目沿いにマンガン濃集(汚染)顕著 コアは軟質 岩片状を呈する
5.40~5.50m 割れ目沿いにマンガン濃集顕著
5.80~5.95m 割れ目面はフィルム状(1mm程度)のマンガンを挟在する同方向の割れ目(45°~55°)密に発達 径2~5mmの石英、長石の斑晶の含有率は5~7% 6.45~6.55m 割れ目沿いにMnおよび酸化鉄を挟在する(1~4mm) 6.50~7.78m ピンク長石多い
7.35~7.80m 高角度(∠80°以上)の割れ目にMnをフィルム状(1mm程度)に挟在する。
7.80~8.32m 斑晶少なく、含有率は1%以下 構成鉱物は細粒
9.44m 割れ目の挟在物は幅6cmのチョコレート状粘土(半固結)
9.78m 割れ目の挟在物は幅4cmの砂混じり粘土(固結)

申請書用柱状図

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	RQD	最大コア長 (cm)	RQD (%)	記事
10						100	15	15			4.80~5.50m ・風化が進み、軟質化している。 5.05~5.50m ・割れ目が多く、岩片状を呈する。 12.35~12.70m ・風化が進み、軟質化している。
						100	11	11			
						100	14	14			
						100	6	0			
						100	19	19			
						100	12	12			14.30~14.65m ・風化が進み軟質化している。
						100	6	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
12	・色調、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・風化の程度、硬軟、割れ目の発達の程度については、記事No.11, No.Aで示していることから削除。
13	・割れ目沿いのマンガン、酸化鉄については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示していることから削除。 ・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
14	・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
15	・粘土を挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
16	・砂混じり粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界 番号 位置	地層	地層 記号	細区分				RQD	岩種 区分	試験 区分	基盤岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等
					割れ目 性状	Mn 含有	風化 性状	その他				
7b	10.10 10.21 10.42 10.60				17						17 10.13m 割れ目にフィルム状(1mm)のMnを挟在する 割れ目周囲のコア表面、褐色汚染顕著 18 10.40~10.60m 構成鉱物は周囲のものより粗粒、コア肌荒れ状 この上下コア表面 褐色汚染顕著 10.48~10.59m 割れ目にフィルム状(1~2mm)のMnを挟在する	
11					19						19 11.20~11.30m 構成鉱物は粗粒	
	11.53 11.67				20						20 11.70~11.95m 割れ目沿いおよびコア表面に白色鉱物が晶出	
12	12.35 12.70 12.90				21						21 12.35~12.70m コアは肌荒れ状。指で鉱物粒子が崩せる。 12.66m 鉱物脈(石英)幅6mmあり 変質し脱色している粒子含む	
13	13.00											

記事内容
17 10.13m 割れ目にフィルム状(1mm)のMnを挟在する 割れ目周囲のコア表面、褐色汚染顕著 18 10.40~10.60m 構成鉱物は周囲のものより粗粒、コア肌荒れ状 この上下コア表面 褐色汚染顕著 10.48~10.59m 割れ目にフィルム状(1~2mm)のMnを挟在する
19 11.20~11.30m 構成鉱物は粗粒
20 11.70~11.95m 割れ目沿いおよびコア表面に白色鉱物が晶出
21 12.35~12.70m コアは肌荒れ状。指で鉱物粒子が崩せる。 12.66m 鉱物脈(石英)幅6mmあり 変質し脱色している粒子含む

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩 級 区 分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	コア採取率 最大コア長 (%)	記事
10						100	15	15		4.80~5.50m ・風化が進み、軟質化している。
						100	11	11		5.05~5.50m ・割れ目が多く、岩片状を呈する。
						100	14	14		12.35~12.70m ・風化が進み、軟質化している。
					炭質 灰白	100	6	0	21	
					炭質 灰白	100	19	19		14.30~14.65m ・風化が進み軟質化している。
					炭質 灰白	100	12	12		
					炭質 灰白	100	6	0		

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
17	・マンガン、褐色汚染、構成鉱物の粒度については、補足的なものであるため削除。
18	・マンガンについては、補足的なものであるため削除。
19	・構成鉱物の粒度については、補足的なものであるため削除。
20	・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
21	・“風化”欄及び“コアの硬さ”欄に基づき、風化が進み、軟質化していると記載。 ・鉱物脈については、補足的なものであるため削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	地層名	柱状	細区分				最大コア長	硬軟度区分	記事内容
				割れ目性状	風化	変質	その他			
13.00	13.00								22 13.00~13.10m ピンク長石を多く含む。コアはやゝ肌荒れ状。 全体に中硬質で指で鉱物粒子は崩せない。	
13.60	13.60								23 13.05~13.30m 高角度割れ目(∠70°)沿いにMn汚染酸化鉄汚染が見られる	
14.20	14.20								24 14.30~14.65m 酸化鉄汚染目立つ、割れ目沿いにコアはやゝ軟質 14.49m 鉱物脈(石英)幅4.8mm 14.59m 鉱物脈(石英)幅2.4mm	
14.80	14.80								25 14.80~14.95m 中角度の割れ目(∠40~∠50°)多く、変質(脱色)した石英脈幅1~2mmを挟在する。	

記事内容
22 13.00~13.10m ピンク長石を多く含む。コアはやゝ肌荒れ状。 全体に中硬質で指で鉱物粒子は崩せない。
23 13.05~13.30m 高角度割れ目(∠70°)沿いにMn汚染酸化鉄汚染が見られる
24 14.30~14.65m 酸化鉄汚染目立つ、割れ目沿いにコアはやゝ軟質 14.49m 鉱物脈(石英)幅4.8mm 14.59m 鉱物脈(石英)幅2.4mm
25 14.80~14.95m 中角度の割れ目(∠40~∠50°)多く、変質(脱色)した石英脈幅1~2mmを挟在する。

標尺	深度	柱状	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	最大コア長(%)	記事
					CM'	100	12	12				24 14.30~14.65m ・風化が進み軟質化している。
				灰白	α	100	6	0	*			17.47~17.91m ・割れ目に沿って、灰白色シルトを挟む。
					CM'	100	7	0	*			
					α	100	3	0	*			17.70~18.00m ・風化が強み、軟質化している。
				淡黄	CM'	100	6	0	*			19.15~19.55m ・風化が進み軟質化している。
			花崗		α	100	14	34	*			20.80~22.35m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
22	・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。 ・コア表面の粗さについては、補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
23	・マンガン、酸化鉄汚染については、補足的なものであるため削除。
24	・“風化”欄及び“コアの硬さ”欄に基づき、風化が進み、軟質化していると記載。 ・酸化鉄汚染、鉱物脈については、補足的なものであるため削除。
25	・割れ目の発達程度については、周囲の割れ目と差異が見られないため削除。 ・鉱物脈については、補足的なものであるため削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

14.55 ~ 20.00 Y.2 風化、多量、記載なし		基盤岩コア観察カード 記事・酸溶性・詳細スケッチ等									
深 度 (m)	層 厚 (m)	層 名	色	構造	割れ目	付着物	備考	備考	備考	備考	備考
15.00	0.20										26
15.20	0.20										27
15.78	0.20										28
16.05	0.20										28
16.75	0.20										28
16.95	0.20										29
17.40	0.20										30
17.47	0.20										31
17.91	0.20										31

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
26 15.00~16.00m ピンク長石を多く含む
27 15.27~15.29m 割れ目(∠30°前後)にMn(2mm以下)を挟在 割れ目周囲は酸化鉄汚染が見られる この部分コア肌荒れ状(幅10cm程度)
28 15.78m 割れ目(∠25°)にMn濃集部(最大10mm)を挟在、 周囲は酸化鉄汚染見られる。この部分、コアは肌荒れ状(幅15cm程度) 径2~4mmの石英、長石の斑晶。斑晶の含有率は5% ピンク長石を多く含む
28 16.05~16.24m コア肌荒れ状、風化程度も上位層下位層より大きい 16.75~17.20m 割れ目にフィルム状(1mm)のMnを挟む割れ目が多い
29 16.95m 7.5Y7/3 淡黄色シルト(2mm)割れ目面に挟在
30 熱水起源の晶出物 17.40~18.00m コア肌荒れ状、下方程肌荒れ程度大きい
31 17.47~17.91m 10Y8/2灰白色シルト(1~2mm)割れ目面に挟在 平滑な割れ目にも荒い割れ目にも挟在 熱水起因の晶出物

申請書用柱状図

標 尺 m	標 高 m	深 度 m	柱 状 図	岩 種 区 分	色 調	岩 級 区 分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	記 事
					灰白	CM'	100	12	12			14.30~14.65m 風化が進み軟質化している。
						CM'	100	6	0			17.47~17.91m 割れ目に沿って、灰白色シルトを挟む。
						CM'	100	7	0			31
						CM'	100	3	0			
					淡黄	CM'	100	6	0			17.70~18.00m 風化が強い、軟質化している。
						CM'	100	6	0			19.15~19.55m 風化が強い軟質化している。
					花崗	CM'	100	14	34			20.80~22.35m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
26	一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
27	マンガン、酸化鉄汚染、コアの粗さについては、補足的なものであるため削除。
28	マンガン、酸化鉄汚染、コア表面の粗さについては、補足的なものであるため削除。 一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
29	シルトを挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
30	コア表面の粗さについては、補足的なものであるため削除。
31	シルトの幅については、ばらつきがあることから削除。 割れ目の平滑さ、熱水起源の晶出物との記載については補足的なものであるため削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

19.55 ~ 20.00 Y.2 風化、変質の記載ナシ		19.55 ~ 20.00 Y.2 観察日									
深さ (m)	深度 (m)	地質名	色	割れ目状態	子の状態	風化	変質	DQD	岩盤区分	建群区分	記事
17		GP	b	C	2	<M					19.55 ~ 19.70 2.5% 変質シルト(2mm)割れ目付帯風化程度の変質 19.70 ~ 18.00 2% 肌荒れ状、1% 軟質
17.90	17.90										32 17.70 ~ 18.00 コア肌荒れ状、コアはやや軟質
18.00	18.00										33 コアは肌荒れ状 18.16 ~ 18.25m 割れ目面にフィルム状(1mm)の鉱物脈(石英)を挟む 石英は白色(脱色)変質
19		GP	b	C	2	<M					34 コアは肌荒れ状 19.15 ~ 19.55m 風化程度、上位、下位のものより大きい コアの黄色度、強い
19.70	19.70										35 19.33 ~ 19.46m 岩組織、乱れている。 19.17 ~ 19.95m 変質した鉱物脈(石英)を挟む。 割れ目の周辺にMn汚染がみられる。
20	20.00										

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
19.55 ~ 20.00 r2 風化、変質の記載ナシ
32 17.70 ~ 18.00 コア肌荒れ状、コアはやや軟質
33 コアは肌荒れ状 18.16 ~ 18.25m 割れ目面にフィルム状(1mm)の鉱物脈(石英)を挟む 石英は白色(脱色)変質
34 コアは肌荒れ状 19.15 ~ 19.55m 風化程度、上位、下位のものより大きい コアの黄色度、強い
35 19.33 ~ 19.46m 岩組織、乱れている。 19.17 ~ 19.95m 変質した鉱物脈(石英)を挟む。 割れ目の周辺にMn汚染がみられる。

申請書用柱状図

標尺	標高	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	コア採取率	最大コア長	記事
m	m	m	図	区分	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
							100	12	12					14.30 ~ 14.65m 風化が進み軟質化している。 17.47 ~ 17.91m 割れ目に沿って、灰白色シルトを挟む。
				灰白		CM'	100	6	0	*				32 17.70 ~ 18.00m 風化が進み、軟質化している。
				淡黄		CM'	100	3	0	*				34 19.15 ~ 19.55m 風化が進み軟質化している。
				花崗斑岩		CH'	100	14	34	*				20.80 ~ 22.35m 硬質で割れ目が少なく、柱状~長柱状を呈する。
				灰白		CH'	100	59	92	*				

記事	コア観察カード(H27年8月) ⇒ 申請書用柱状図
32	・“風化”欄及び“コアの硬さ”欄に基づき風化が進み、軟質化していると記載。 ・コアの粗さについては、補足的なものであるため削除。
33	・鉱物脈、コアの粗さについては、補足的なものであるため削除。
34	・コアは肌荒れ状との記載については、補足的なものであるため削除。 ・表現の見直し(コアの黄色度強い⇒風化が進み、軟質化している)
35	・岩組織乱れているとの記載については、岩盤に劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・鉱物脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

22.9年~23.23		風化・変質・崩壊		細区分		最大コア長		破砕区分		基盤岩コア観察カード	
(m)	(m)	位置	変質	崩壊	風化	変質	最大コア長	破砕区分	基盤岩	記事・破砕性状・詳細スケッチ等	
20	20.07									20.10~21.00m 高角度(70°以上)の割れ目は、挟在物を有するものも含めて開口していない。 コアは見掛け長柱状を呈するが開口していない割れ目があるためRQDは低下している。	36
21	21.00									21.10~21.60m 高角度(70°以上)の割れ目は開口していない。高角度割れ目の密集部では、割れ目沿いに砂状化している。	38

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
36 コアは硬質 風化程度 上位の層より弱い。 20.10~21.00m 高角度(70°以上)の割れ目は、挟在物を有するものも含めて開口していない。 コアは見掛け長柱状を呈するが開口していない割れ目があるためRQDは低下している。
37 20.80~22.35m 硬質である。
38 21.10~21.60m 高角度(70°以上)の割れ目は開口していない。 高角度割れ目の密集部では、割れ目沿いに砂状化している。

申請書用柱状図

標尺	高さ	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	コア採取率	最大コア長	記事
m	m	m	図	区分	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
20				花崗斑岩	灰白	CH'	100	6	0					19.15~19.55m ・風化が進み軟質化している。
							100	14	34					20.80~22.35m ・硬質で割れ目が少なく、柱状~長柱状を呈する。
							100	59	92					22.91~23.23m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰オリーブ色の粘土状~淡黄色の粘土混じり硬質を呈する。
							100	7	0					・灰オリーブ色粘土：累計厚10mm ・走向・傾斜はE74°Nである。 ・上盤境界の傾斜は26°、下盤境界の傾斜は35°である。
							100	10	46					24.65~25.00m ・継方向の割れ目が連続する。
							100	6	0					25.17~25.4m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
36	・硬軟、割れ目の発達程度、風化については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目の開口状況については、補足的なものであるため削除。
37	・“コアの形状”欄に基づき、柱状~長柱状と記載。
38	・割れ目の傾斜、割れ目の開口状況については、補足的なものであるため削除。 ・一部の割れ目沿いで砂状化するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

22.92~23.23 r4と3 風化、変質の記載ナシ		基礎岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等									
深さ (m)	変位 (mm)	変位位置	変位方向	変位量	変位性状	変位原因	変位時期	変位回数	変位速度	変位方向	変位量
22.92											
22.99											
23.01											
23.02											
23.03											
23.04											
23.05											
23.06											
23.07											
23.08											
23.09											
23.10											
23.11											
23.12											
23.13											
23.14											
23.15											
23.16											
23.17											
23.18											
23.19											
23.20											
23.21											
23.22											
23.23											

記事内容
22.91~23.23 r4と3 風化、変質の記載ナシ
39 ●22.91~23.23m:破砕帯 主せん断面22.91m
40 22.91~22.92m:Hc-1 上端は28°で直線的、下端は一部波打つが概ね34°で連続厚さ2~10mmの軟質粘土。石英粒、岩片はほとんど含まない(5%以下) 上盤側には主せん断面と20°程度で斜交する直線的な割れ目(Si)が分布 色調は灰オリーブ(5Y6/2)
41 22.92~23.23m:Hj 上端34°、下端35°でほぼ直線的に連続、径5~20mmの岩片(一部粘土化)と岩片間の粘土からなる。粘土混り岩片状を呈する。厚さ310mm(コア長)下端との境界に厚さ1~3mmの灰白色(5Y8/2)の軟弱粘土を挟む。 上端側の22.97mは浅は、主せん断面と平行~20°で斜交する直線的な割れ目(Sj:2次せん断面)が3本分布する。色調は淡黄(5Y8/2)
42 23.83m ∠42°の割れ目(Sj)が交差する∠78°の割れ目を切っている(変位量3mm、右ズレ)
24.20~24.30m ∠60°程度の同方向の密着した割れ目が発達
43 24.65~25.00m 縦方向(∠70°以上)の割れ目により、半割れ状を呈する。 割れ目面には厚さ1mm程度のMn、砂粒子を挟む。

標尺	高さ	深度	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア率 (%)	記事
m	m	m	図	区分	調	分	(%)	(cm)				(%)	
20				花崗斑岩	灰白	GH'	100	6	0				19.15~19.55m ・風化が進み軟質化している。 20.80~22.35m ・硬質で割れ目が少なく、柱状~長柱状を呈する。
					灰白	CL'	100	12	12				●22.91~23.23m ・破砕帯である。 ・正断層センスである。 ・灰オリーブ色の粘土状~淡黄色の粘土混り岩片を呈する。 ・灰オリーブ色粘土:累計厚10mm ・走向・傾斜は35°E74°である。 ・上盤境界の傾斜は28°、下盤境界の傾斜は35°である。 24.65~25.00m ・縦方向の割れ目が連続する。 ●25.17~25.4m
					灰白	CM	100	7	0				
					灰白	CM	100	10	46				
					灰白	CM	100	6	0				
					灰白	CM	100	55	55				
					灰白	CM	100	17	27				
					灰白	CM	100	21	37				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
39~41	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 表現の見直し(粘土混り岩片状→粘土混じり礫状) 粘土の累計幅については、最大値を記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
42	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目を切っているとの記載については、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示していることから削除。 割れ目の傾斜、割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。
43	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の傾斜、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 割れ目沿いの砂粒子の挟在については、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

基盤岩コア観察カード. 記事・破砕帯・詳細スケッチ等. 25.17~25.44, 25.65~25.77, 25.77~26.12m. Includes columns for depth, lithology, and observations.

記事内容. 25.17~25.44 r3 25.65~25.77 r3. 風化, 変質の記載なし. 44 ●25.17~25.44m: 破砕帯 主せん断面25.17m. 45 25.17~25.18m: Hc-2. 46 ●25.65~25.77m: 破砕帯 主せん断面25.76m. 47 25.74~25.76m: Hb. 48 25.76~25.77m: Hc-1. 49 25.77~26.12m 粘土化著しく軟質.

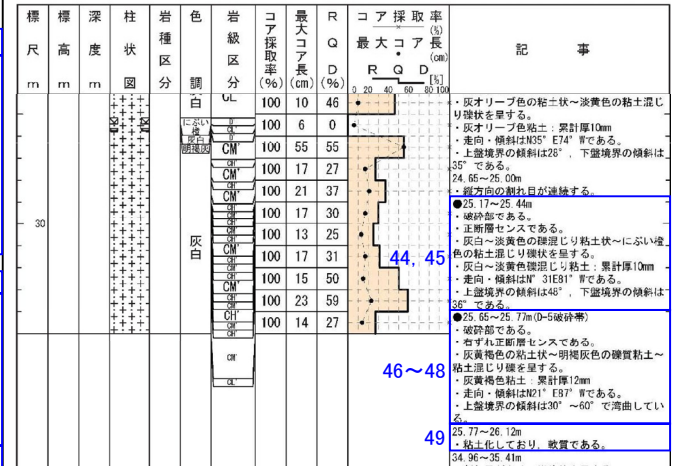


Table with 2 columns: 記事 (Article) and コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図 (Coring Card to Application Form Log). Rows correspond to observation intervals 44, 45; 46~48; and 49.

H27-D5-1

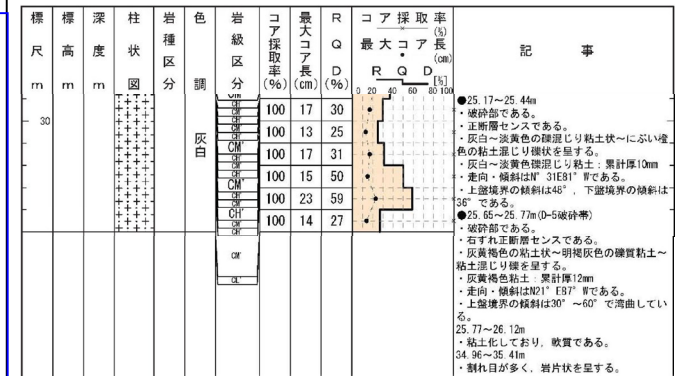
コア観察カード (H27年8月)

基盤岩コア観察カード									
記事・岩種区分・詳細スケッチ等									
深さ (m)	層位	岩種	色	岩級区分	最大コア長 (cm)	RQD (%)	コア採取率 (%)	記事	備考
26.45								26.45-26.75m 60°程度の同方向の密着した割れ目が発達 27.10-30.00m コアは硬質。29.00mまでピンク長石多い。 径3~5mmの石英、長石、黒雲母の斑晶を含む。 含有率は5%程度。	
27.10								27.31mm(∠54°)27.41mm(∠52°)に見られる割れ目の上側に同じ方向とこれと斜交する割れ目が亀甲に発達する。 27.51-27.60m 40°前後の数本の割れ目と、これと斜交する割れ目が亀甲状に発達する。	
28.20								28.20-28.55m 開口していない縦方向の割れ目あり 所々にMn(1mm)を挟在する	
28.60								28.60-29.00m 割れ目は少なく、開口していない。	
29.00								29.00-29.45m ヘアークラック発達、同方向は40°前後の傾斜で分布する。	
29.80								29.80-30.00m 40°、45°の同方向の割れ目が発達。	
30.00								30.00-33.00m コアは硬質 径3~5mmの石英、長石、黒雲母の斑晶を5%程度含む。 30.04m 30.50m 割れ目(それぞれ40°、64°)の酸化鉄汚染およびMn汚染顕著。 30.40-30.60m コアにMn汚染がみられる。この周囲酸化鉄汚染程度大きい。 30.72m 割れ目(∠64°)に幅2mmの酸化鉄および砂粒子(石英粒多い)を挟む。	
31.04								31.04-31.15m 割れ目およびコアにMn汚染がみられる。	
31.30								31.30-31.40m 50°前後の割れ目とこれに斜交する割れ目が発達 31.40m付近 同じ系統の割れ目が2~5mm間隔で発達 この部分のコアは軟質	
32.20								32.20-32.40m 不規則なヘアークラックが発達	

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
26.45-26.75m 60°程度の同方向の密着した割れ目が発達 27.10-30.00m コアは硬質。29.00mまでピンク長石多い。 径3~5mmの石英、長石、黒雲母の斑晶を含む。 含有率は5%程度。 27.31mm(∠54°)27.41mm(∠52°)に見られる割れ目の上側に同じ方向とこれと斜交する割れ目が亀甲に発達する。 27.51-27.60m 40°前後の数本の割れ目と、これと斜交する割れ目が亀甲状に発達する。
28.20-28.55m 開口していない縦方向の割れ目あり 所々にMn(1mm)を挟在する
28.60-29.00m 割れ目は少なく、開口していない。
29.00-29.45m ヘアークラック発達、同方向は40°前後の傾斜で分布する。
29.80-30.00m 40°、45°の同方向の割れ目が発達。
30.00-33.00m コアは硬質 径3~5mmの石英、長石、黒雲母の斑晶を5%程度含む。 30.04m 30.50m 割れ目(それぞれ40°、64°)の酸化鉄汚染およびMn汚染顕著。 30.40-30.60m コアにMn汚染がみられる。この周囲酸化鉄汚染程度大きい。 30.72m 割れ目(∠64°)に幅2mmの酸化鉄および砂粒子(石英粒多い)を挟む。
31.04-31.15m 割れ目およびコアにMn汚染がみられる。
31.30-31.40m 50°前後の割れ目とこれに斜交する割れ目が発達 31.40m付近 同じ系統の割れ目が2~5mm間隔で発達 この部分のコアは軟質
32.20-32.40m 不規則なヘアークラックが発達

申請書用柱状図



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
50, 51	<ul style="list-style-type: none"> ・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示していることから削除。 ・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。 ・マンガン、割れ目の開口状況、酸化鉄汚染については、補足的なものであるため削除。 ・一部の割れ目に砂を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

H27-D5-1

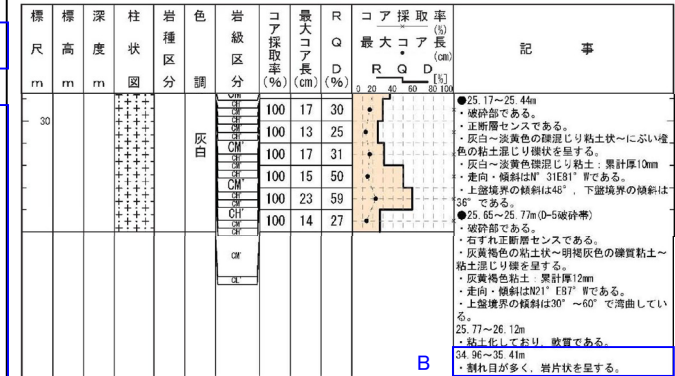
コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層別	深度 (m)	地層	岩種	細区分				崩壊	割れ目	備考	
				割れ目の形状	風化	崩壊	割れ目の形状				
D5	32.82	Cp	灰白	CH	2	B	+	+	+	52	32.39, 32.53, 32.92, 32.94m 割れ目に石英粒子および10Y8/2 灰白色シルトを挟在。幅1~2mm。
	32.95										32.95m付近 同じ系統の割れ目が4~6mm間隔で発達。この部分のコアは軟質
	33.20										33.20~33.30m 70° 前後の密着した不連続な割れ目が少数発達。
	33.85										33.85m 62° の割れ目に幅1~2mm、砂粒子を挟在割れ目周囲は酸化鉄褐色汚染される。
	34.68										34.68~34.82m 40°、45° の同系統の割れ目が発達割れ目面はいずれもMn鉱染され黒色化
	34.96										34.96m, 34.98m 割れ目沿いに幅2mmの黒色粘土(Mn)を挟在。
	35.00										
	35.05										
	35.10										
	35.15										

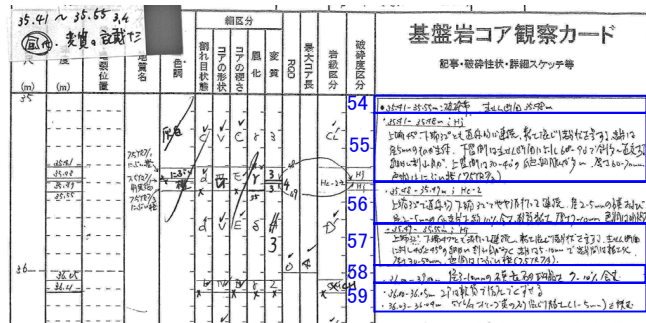
記事内容
52
53
B



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
52	・シルトを挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
53	・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示していることから削除。 ・割れ目の傾斜、割れ目の密着状態、マンガン、褐色汚染については、補足的なものであるため削除。 ・一部の割れ目に砂や粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
B	・“コアの形状”欄に基づき、岩片状と記載。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)



コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容	
35.41~35.55	3, 4 風化, 変質の記載ナシ
54	●35.41-35.55m: 破碎帯 主せん断面35.48m 35.41-35.48m; Hj 上端45° 下端32° とも直線間に連続、粘土混じり岩片状を呈する。岩片は径5mmのものが主体。下盤側は主せん断面に対し60°~90°で斜交~直交する
55	細かい割れ目が上盤側は30~40°の白色細脈が多い。厚さ60~70mm 色調はにぶい橙(7.5YR7/3)。
56	35.48-35.49m; Hc-2 上端32°で直線の下端32°でやや波打って連続。径2~5mmの石英および径2~5mmのGp岩片を約10%含む軟質粘土。厚さ7~10mm色調は明褐灰(7.5YR7/1)。
57	35.49-35.55m; Hj 上端32° 下端47° とも波打って連続。粘土混じり岩片状を呈する。主せん断面に対し40°と45°の細かい割れ目が多く岩片は5~10mmで岩片間は粘土化厚さ30~50mm。色調はにぶい橙(7.5YR7/3)
58	36.00-39.00m 径3~10mmの石英、長石の斑晶を7~10%含む
59	36.00-36.05m コアは軟質で指圧でくずせる。 36.03-36.04m 5Y6/4オリーブ黄の砂混じり粘土(1~5mm)を挟む

申請書用柱状図

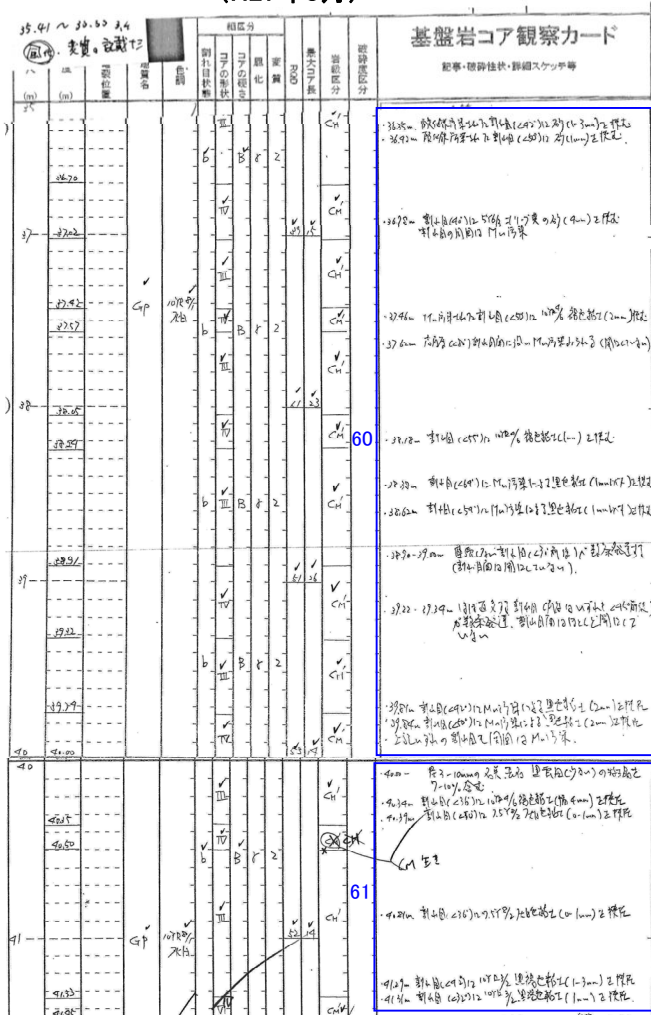
標尺	深度	柱状	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長D(cm)	R	最大コア長Q(%)	最大コア長D(%)	記事
40			花崗斑岩	灰白	CH	100	4	0			●35.41~35.55m ・破碎部である。 ・正断層センスである。 ・厚さ5mmの連続した粘土状にぶい橙色の粘土混じり礫状を呈する。 ・明褐色粘土、粒径最大10mm。 ・走向・傾斜はN27°Wである。 ・上盤境界の傾斜は45°、下盤境界の傾斜は47°である。
					CH	100	15	39			34~57
					CH	100	23	61			
					CH	100	26	61			
					CH	100	14	53			
					CH	100	14	52			59
					CH	100	27	53			35.55~36.00m ・斜交しており、軟質である。
					CH	100	32	73			36.05~45.00m ・硬質で、主として短柱~柱状を呈する。 41.45~41.60m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
54~57	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 径2~5mmの石英および径2~5mmのGp岩片を約10%含むとの記載に基づき、礫混じり粘土状と記載。 表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) 粘土の累計幅については、最大値を記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破碎度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
58	<ul style="list-style-type: none"> 一般的な岩相であり、石英及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
59	<ul style="list-style-type: none"> “コアの硬さ”欄に基づき、35.55~36.05m、粘土化しており、軟質であると記載。 粘土の幅については、ばらつきがあるため削除。

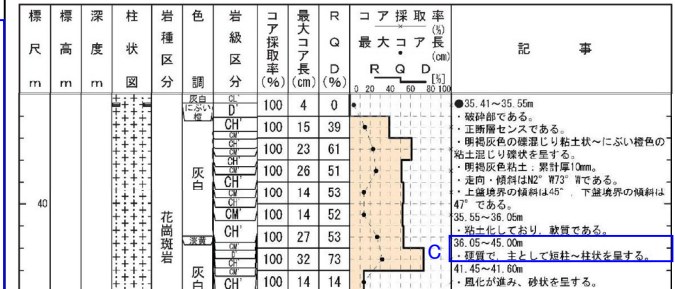
コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容
36.35m 酸化鉄汚染された割れ目(∠42°)に砂(1~3mm)を挟む。 36.42m 酸化鉄汚染された割れ目(∠50°)に砂(1mm)を挟む。
36.78m 割れ目(40°)に5Y6/3オリーブ黄の砂(4mm)を挟む 割れ目の周囲はMn汚染
37.46m Mn汚染された割れ目(∠50°)に10YR4/6褐色粘土(2mm)挟む 37.62m 高角度(∠80°)割れ目面に沿いMn汚染みられる。(開口していない)
38.18m 割れ目(∠55°)に10YR4/6褐色粘土(1mm)を挟む
38.38m 割れ目(∠64°)にMn汚染による黒色粘土(1mm以下)を挟む 38.62m 割れ目(∠59°)にMn汚染による黒色粘土(1mm以下)を挟む
38.90-39.00m 連続しない割れ目(∠30°前後)が数条発達する。 (割れ目面は開口していない) 39.22-39.34m ほぼ直交する割れ目(角度はいずれも∠45°前後)が数条発達、 割れ目面はほとんど開口していない。
39.81m 割れ目(∠42°)にMn汚染による黒色粘土(2mm)を挟在 39.84m 割れ目(∠50°)にMn汚染による黒色粘土(2mm)を挟在 上記いずれの割れ目も周囲はMn汚染
40.00- 径3~10mmの石英、長石、黒雲母(少ない)の斑晶を7~10%含む 40.34m 割れ目(∠36°)に10YR4/6褐色粘土(幅4mm)を挟在 40.39m 割れ目(∠30°)に7.5Y8/2灰白色粘土(0~1mm)を挟在
40.81m 割れ目(∠36°)に7.5Y8/2灰白色粘土(0~1mm)を挟在
41.29m 割れ目(∠42°)に10YR3/2黒褐色粘土(1~3mm)を挟在 41.31m 割れ目(∠32°)に10YR3/2黒褐色粘土(1mm)を挟在



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
C	<ul style="list-style-type: none"> “コアの硬さ”欄に基づき、硬質と記載。 “コアの形状”欄に基づき、短柱~柱状と記載。
60, 61	<ul style="list-style-type: none"> 一部の割れ目に砂や粘土を挟在するが、いずれも周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示していることから削除。 酸化鉄汚染、マンガン、割れ目の開口状況については、補足的なものであるため削除。 一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。

H27-D5-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	境界 位置	地層	色	割れ目				RQD	最大 コア長 (cm)	変質	備考
				傾斜	長さ	間隔	形状				
41.45		花崗斑岩	灰白	46°	2.3mm	30mm	30	14	変質は中程度	41.45-41.60m 5Y8/4淡黄色砂状部 変質は中程度	
42.19		花崗斑岩	灰白	46°	2.3mm	30mm	30	14	変質は中程度	42.19m 割れ目(∠46° Mn汚染2.3mm)の上位側30mmと下位側40mmのコアは周囲より酸化鉄汚染顕著	
42.92		花崗斑岩	灰白	46°	0.1mm	15-30mm	30	4	変質は中程度	42.92m 割れ目(∠46° Mn汚染0.1mm)の上位側15-30mmと下位側25mmのコアは周囲より酸化鉄汚染顕著	
43.10		花崗斑岩	灰白	80°	2条	2条	30	17	変質は中程度	43.10-43.80m 高角度(∠80°)の割れ目が2条発達。(割れ目は一部開口)割れ目はMn汚染(0~1mm)がみられる。	
43.50		花崗斑岩	灰白				30	21	変質は中程度	43.50~ 径3~5mmの石英、長石の斑晶を含む斑晶の含有率は3%程度と低い。	
44.28		花崗斑岩	灰白				30	14	変質は中程度	44.28-44.53m 割れ目およびコアの酸化鉄汚染がみられる。	
44.46		花崗斑岩	灰白	60°	0.1mm	3mm	30	17	変質は中程度	44.46m 割れ目(∠60°)にMn汚染(0~3mm)がみられる。	
44.49		花崗斑岩	灰白	40°	0.1mm	1mm	30	21	変質は中程度	44.49m 割れ目(∠40°)にMn汚染(0~1mm)がみられる。	
44.70		花崗斑岩	灰白				30	14	変質は中程度	44.70-44.80m 割れ目およびコアの酸化鉄汚染がみられる。	
44.69		花崗斑岩	灰白	48°	0.1mm	1mm	30	17	変質は中程度	44.69m 割れ目(∠48°)にMn汚染(0~1mm)がみられる。	
44.78		花崗斑岩	灰白	70°	0.1mm	1mm	30	21	変質は中程度	44.78m 割れ目(∠70°)にMn汚染(0~1mm)がみられる。	

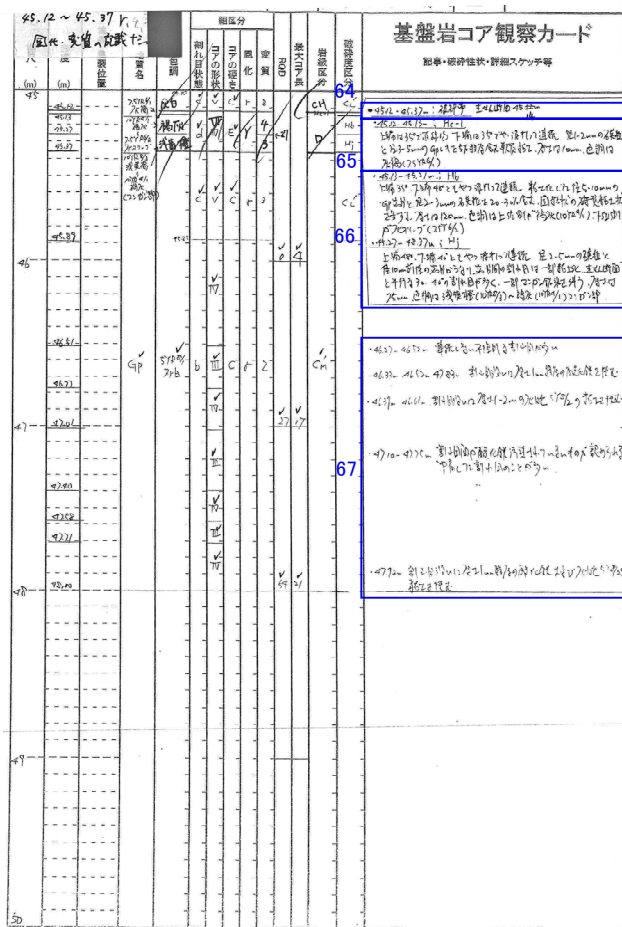
記事内容
41.45-41.60m 5Y8/4淡黄色砂状部 変質は中程度
42.19m 割れ目(∠46° Mn汚染2.3mm)の上位側30mmと下位側40mmのコアは周囲より酸化鉄汚染顕著
42.92m 割れ目(∠46° Mn汚染0.1mm)の上位側15-30mmと下位側25mmのコアは周囲より酸化鉄汚染顕著
43.10-43.80m 高角度(∠80°)の割れ目が2条発達。(割れ目は一部開口)割れ目はMn汚染(0~1mm)がみられる。
43.50~ 径3~5mmの石英、長石の斑晶を含む斑晶の含有率は3%程度と低い。
44.28-44.53m 割れ目およびコアの酸化鉄汚染がみられる。
44.46m 割れ目(∠60°)にMn汚染(0~3mm)がみられる。
44.49m 割れ目(∠40°)にMn汚染(0~1mm)がみられる。
44.70-44.80m 割れ目およびコアの酸化鉄汚染がみられる。
44.69m 割れ目(∠48°)にMn汚染(0~1mm)がみられる。
44.78m 割れ目(∠70°)にMn汚染(0~1mm)がみられる。

標尺	高さ	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	コア採取率			記事
												R	Q	D	
40				花崗斑岩	灰白	CH	100	14	52			47°		47°である。 35.55~38.05m ・粘土化しており、軟質である。 38.05~45.00m ・硬質で、主として短柱~柱状を呈する。 41.45~41.60m ・風化が顕著、砂状を呈する。	
				花崗斑岩	灰白	CH	100	27	53			62		●45.12~45.37m ・硬質部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状~褐色~灰オリーブ色の硬質粘土~淡黄色~褐色の粘土混じり硬状を呈する。 ・累計厚10mm ・走向・傾斜は33° E22° である。 ・上盤境界の傾斜は35°、下盤境界の傾斜は40°である。	

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
62	・色調については、補足的なものであるため削除。 ・変質については、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ削除し、“風化”欄に基づき風化が進みと記載。
63	・マンガンや酸化鉄汚染については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一般的な岩相であり、石英及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。

H27-D5-1

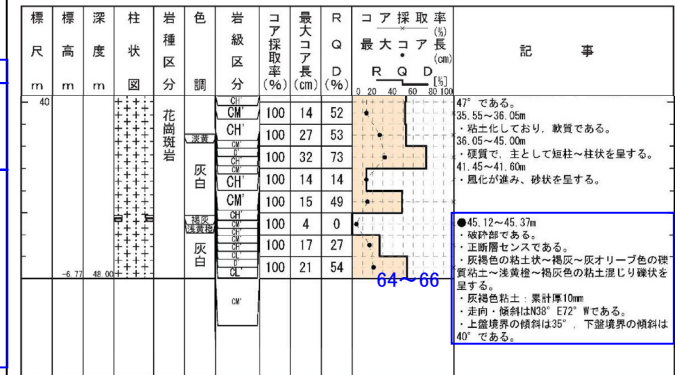
コア観察カード (H27年8月)



コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容	
45.12~45.37 r	風化・変質の記載ナシ
64	●45.12~45.37m: 破碎帯 主せん断面45.14m 45.12~45.13m: Hc-1
65	上端は35°で直線の下端は35°でやや波打って連続 径1~2mmの石英粒と径3~5mmのGpレキを5%程度含む軟質粘土。厚さは10mm色調は灰褐(7.5YR6/1)
66	45.13~45.27m: Hb 上端35° 下端48°ともやや波打って連続 粘土化した径5~10mmのGp岩片と径2~3mmの石英粒を20~30%含む固結状の礫質粘土状を呈する。厚さは120mm色調は上端側が褐灰(10YR4/1), 下端側が灰オリブ(7.5Y6/2)
66	45.27~48.37m: Hj 上端48° 下端40°ともやや波打って連続 径2~5mmの石英粒と径10mm前後の岩片からなり、岩片間の割れ目は一部粘土化。主せん断面と平行な30~40°の割れ目が多く一部でマンガン鉱染を伴う。厚さは75mm色調は浅黄橙(10YR8/3)~褐灰(10YR4/1)マンガン部
67	46.27~46.52m 連続しない不規則な割れ目が多い。 46.33m 46.52m 47.83m 割れ目沿いに厚さ1mm程度の酸化鉄を挟む。 46.39m 46.61m 割れ目沿いに厚さ1~2mmの灰白色5Y5/2の粘土を挟む。 47.10~47.75m 割れ目面が酸化鉄汚染されているものが認められる。 ゆる着した割れ目のことが多い。 47.92m 割れ目沿いに厚さ1mm程度の酸化鉄および灰白色5Y8/2の粘土を挟む。

申請書用柱状図



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
64~66	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 表現の見直し(岩片間の割れ目は一部粘土化→粘土混じり礫状) ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 破碎度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
67	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 割れ目沿いの酸化鉄、割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。 一部の割れ目に粘土を挟み込むが、いずれも直線性に乏しいことから削除。

余白

第865回審査会合資料2-2-2の修正箇所

設置許可申請書案

記事	
72	●92.86~93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・にふい黄橙~明褐色の粘土混り角礫状~灰白色の角礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70°である。
75	

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
72	●92.86~93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・にふい黄橙~明褐色の粘土混り角礫状~灰白色の角礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70°である。
75	

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
72	●92.86~93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70°である。
75	

委託報告書 (平成30年)

標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	記	コア採取率
尺	度	状	種	区	度	れ	化	事	(%)
(m)	(m)	図	分	軟	目	目	質		最大コア長
		分	類	状	の	の			cm
		類	別	態	状	形			R Q D
		別	状	化	質	状			L [%]
		未固結	粘土状部	軟	72	79		●92.86~93.53m 傾斜帯(D-5) 傾斜は70°である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70°である。	0
		未固結	粘土状部	軟	74	75		92.50~93.53m 褐色の凝縮しり粘土物を呈する。未固結の粘土状部からなり、幅は0.8cmである。傾斜は75°である。	100

審査資料 (平成30年11月30日)

記事	
72	●92.86~93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70°である。
75	

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
72	●92.86~93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70°である。
75	

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
72~75	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。その後、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に薄片観察による断層岩区分を行ったが、肉眼観察による判断結果から変更は無い。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所の累計幅を記載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・下端境界の見かけ傾斜について、70°と書くべきところを誤って75°と記載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・割れ目の密集部については、固結礫状部に含めているため追記せず。 	変更なし

設置許可申請書案

記事	
72	<ul style="list-style-type: none"> ●92.86～93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・にふい黄橙～明褐色の粘土混り角礫状～灰白色の角礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70° である。
75	

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
72	<ul style="list-style-type: none"> ●92.86～93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・にふい黄橙～明褐色の粘土混り角礫状～灰白色の角礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70° である。
75	

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
72	<ul style="list-style-type: none"> ●92.86～93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70° である。
75	

委託報告書 (平成30年)

標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	記	コア採取率
尺	度	状	種	区	度	れ	化	事	(%)
(m)	(m)	図	分	別	軟	目	質		最大コア長
		分	類	の	状	の			cm
		類	別	状	態	形			R Q D
		別	別	化	質	状			L [%]
		断層	未固結	72	2			<ul style="list-style-type: none"> ●92.86～93.53m 破砕帯 (D-5) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70° である。 	
		断層	未固結	75	2				

審査資料 (平成30年11月30日)

記事	
72	<ul style="list-style-type: none"> ●92.86～93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70° である。
75	

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
72	<ul style="list-style-type: none"> ●92.86～93.53m (D-5破砕帯) ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に褐灰色の固結礫状部からなる。 ・褐色の未固結粘土状部：累計幅0.8cm ・走向・傾斜はN5° W82° Eである。 ・下端境界の傾斜は70° である。
75	

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
72～75	(誤記) 下端境界の見かけの傾斜として、75° と書くべきところを誤って70° と誤って記載。	・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。その後、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に薄片観察による断層岩区分を行ったが、肉眼観察による判断結果から変更は無い。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所の累計幅を記載。	・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・誤記修正(下端境界の傾斜は70° →75°)	・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・割れ目の密集部については、固結礫状部に含めているため追記せず。 ・誤記修正の反映漏れ。	変更なし

設置許可申請書案	設置許可申請書 (平成27年11月)	審査資料 (平成29年12月22日)	委託報告書 (平成30年)	審査資料 (平成30年11月30日)	審査資料 (令和2年2月7日)
<p>記事</p> <p>72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。 ・上層境界の傾斜は53°、下層境界の傾斜は60°である。</p> <p>73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。</p> <p>76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。</p>	<p>記事</p> <p>72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。 ・上層境界の傾斜は53°、下層境界の傾斜は60°である。</p> <p>73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。</p> <p>76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。</p>	<p>記事</p> <p>72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。</p> <p>73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。</p> <p>76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。</p>	<p>標尺 高さ (m)</p> <p>柱状 区 分</p> <p>岩 色</p> <p>硬 軟</p> <p>割れ 目 状 態</p> <p>風 化 状 態</p> <p>記 事</p> <p>コア採取率 (%) 最大コア長 — cm R Q D L [%]</p>	<p>記事</p> <p>72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。</p> <p>73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。</p> <p>76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。</p>	<p>記事</p> <p>72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。</p> <p>73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。</p> <p>76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。</p>

記事	申請書案→ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)→ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)→ 報告書	報告書→ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)→ 審査資料(R2.2.7)
A	変更なし (誤記)報告書に該当する記載なし。	・変質している区間の境界の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。	・誤記修正(記事と整合する観察結果が認められないことから、記事を削除)。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・記事削除の反映漏れ。	変更なし
82	—	—	・割れ目について記載(割れ目沿いの風化)。 ・硬軟を記載。	・硬軟の程度については、岩級区分で示しているため追記せず。 ・割れ目沿いの風化については、補足的なものであるため追記せず。	—
83	—	—	・角礫混じり砂質シルト状の区間を記載。	・角礫混じり砂質シルト状を呈するが、内部にせん断構造が認められず、周囲の岩盤に劣化が認められないことから追記せず。	—
84	変更なし	変更なし	・硬軟や割れ目の発達程度を記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・“コア形状”欄に基づき長柱状と記載。	変更なし
85	—	—	・割れ目について記載(割れ目沿いの風化・酸化)。	・割れ目沿いの風化、酸化については、補足的なものであるため追記せず。	—
86	—	—	・割れ目の発達程度を記載。 ・割れ目について記載(割れ目沿いの細粒、細片化)。	・割れ目沿いで細粒、細片化するが、掘削時の機械割れと判断し追記せず。	—
87	変更なし	変更なし	・割れ目の発達程度を記載。 ・風化の程度を記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・割れ目の発達程度については、“コア形状”欄に基づき岩片~短柱状と記載。 ・風化の程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため追記せず。	変更なし

設置許可申請書案

記事	
A	72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。 ・上層境界の傾斜は53°、下層境界の傾斜は60°である。
84	73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。
87	76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
A	72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。 ・上層境界の傾斜は53°、下層境界の傾斜は60°である。
84	73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。
87	76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
A	72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。
84	73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。
87	76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。

委託報告書 (平成30年)

標尺	標高	深	柱状	岩種	色	硬軟	割れ目の形状	風化	記事	コア採取率 最大コア長 R Q D L [%]
(m)	(m)	(m)	図	分		期	状	化		
						相灰	細粒	硬	82	71.69~72.72m 割れ目沿いの風化で上部にのみ発達している。
						相灰	細粒	硬	83	72.51~72.57m 上層の傾斜60°下層の傾斜65° 層20cmの角程度に砂礫シルト状を呈する。
						相灰	細粒	硬	84	73.51~74.70m 割れ目が少なく硬質である。
						相灰	細粒	硬	85	74.98m 割れ目沿いに層20cmに少くとも風化・酸化帯が分布する。
						相灰	細粒	硬	86	75.43~75.66m 割れ目が多く細粒・細片化している。
						相灰	細粒	硬	87	76.68~77.80m 割れ目が多く、風化も濃み一貫帯化している。

審査資料 (平成30年11月30日)

記事	
A	72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。
84	73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。
87	76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
A	72.39~72.63m ・変質している。 ・淡黄褐色のシルト混じり砂礫状を呈する。
84	73.51~74.70m ・硬質で割れ目が少なく、長柱状を呈する。
87	76.68~77.80m ・割れ目が多く、岩片~短柱状を呈する。

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
82	-	-	・割れ目について記載(割れ目沿いの風化)。 ・硬軟を記載。	・硬軟の程度については、岩級区分で示しているため追記せず。 ・割れ目沿いの風化については、補足的なものであるため追記せず。	-
A, 83	変更なし (誤記)72.51~72.57mと書くべき ところを誤って72.39~72.63mと 記載。	・変質している区間の境界の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。	・誤記修正(72.39~72.63m→72.51~72.57m)。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・誤記修正の反映漏れ。	変更なし
84	変更なし	変更なし	・硬軟や割れ目の発達度を記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・“コア形状”欄に基づき長柱状と記載。	変更なし
85	-	-	・割れ目について記載(割れ目沿いの風化・酸化)。	・割れ目沿いの風化、酸化については、補足的なものであるため追記せず。	-
86	-	-	・割れ目の発達度を記載。 ・割れ目について記載(割れ目沿いの細粒、細片化)。	・割れ目沿いで細粒、細片化するが、掘削時の機械割れと判断し追記せず。	-
87	変更なし	変更なし	・割れ目の発達度を記載。 ・風化の程度を記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・割れ目の発達度の程度については、“コア形状”欄に基づき岩片~短柱状と記載。 ・風化の程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため追記せず。	変更なし

設置許可申請書案

記事	
34	●28.50~28.69m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・浅黄橙~黄橙色の礫質粘土状~粘土混じり礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
34	●28.50~28.69m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・浅黄橙~黄橙色の礫質粘土状~粘土混じり礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
34	●28.50~28.69m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主ににふい黄橙色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄橙色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

委託報告書 (平成30年)

標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	記	コア採取率
尺	度	状	種	区	軟	れ	化	事	(%)
(m)	(m)	図	分	間	状	目	質		
						の			
						発			
						達			
						の			
						程			
						度			
						を			
						記			
						載			
						す			
						。			
30								26.42~27.65m 割れ目が多い。0.5~1.0cm間隔で連続して発達する。	0
32								28.21~28.50m 割れ目が多い。0.2~1cm間隔で発達し、連続する。破砕帯は0.3cmである。	0
34								28.50~28.69m 破砕帯 (f-b14-2-1) 破砕部である。 28.50~28.69m 浅黄橙~黄橙色の固結礫状部からなる。主ににふい黄橙色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm 28.50~28.69m 浅黄橙~黄橙色の礫質粘土状~粘土混じり礫状を呈する。未固結の粘土質部からなり、幅約0.1cmである。上層地層の傾斜は50°である。	0
36								32.40~32.67m 割れ目が多い。角礫状を呈する。主ににふい黄橙色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm 32.40~32.67m 割れ目が多い。角礫状を呈する。	0
38								33.91~35.14m 非常に硬軟であるが割れ目がやや多一部で片状化している。	0
40								34.7m 傾斜約 傾斜は13m 黄褐色~灰白色の粘土状である。	0

審査資料 (平成30年11月30日)

記事	
34	●28.50~28.69m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主ににふい黄橙色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄橙色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
34	●28.50~28.69m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主ににふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

記事	申請書案⇒ 申請書 (H27.11)	申請書 (H27.11) ⇒ 審査資料 (H29.12.22)	審査資料 (H29.12.22) ⇒ 報告書	報告書 ⇒ 審査資料 (H30.11.30)	審査資料 (H30.11.30) ⇒ 審査資料 (R2.2.7)
32.33	—	—	・割れ目の発達程度を記載。	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
34~36	変更なし	・誤記修正 (28.50~28.69m→28.50~28.68m)。 ・破砕帯名を記載。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合 (H29.12.22) までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩 (断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト) を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所を累計幅を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・誤記修正 (正断層センス→左ずれ正断層センス)。	・破砕帯を記載。 ・破砕部区分を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分 (固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ) を併記。	審査資料 (H29.12.22) と同様 ・破砕帯については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 ・粘土の細脈が分布するが、連続性や直線性に乏しいことから追記せず。	変更なし (※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)
37	—	—	・割れ目の発達程度を記載。	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
38	—	—	・割れ目の発達程度を記載。	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
39	変更なし	変更なし	・割れ目の発達程度を記載。	審査資料 (H29.12.22) と同様 ・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。	変更なし
40	—	—	・硬軟や割れ目の発達程度を記載。	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
41	—	—	・粘土脈を記載。	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に同方向の劣化が認められないことから追記せず。	—

設置許可申請書案

記事	
34	●28.50~28.68m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・淡黄緑～黄褐色の礫質粘土状～粘土混じり礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
39	32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
34	●28.50~28.68m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・淡黄緑～黄褐色の礫質粘土状～粘土混じり礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
39	32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
34	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
39	32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

委託報告書 (平成30年)

標高	深度	柱状	岩種	色	硬軟	割れ目	風化	記	コア採取率
尺	高度	状	区	目	状	の	状	事	(%)
(m)	(m)	図	分	期	軟	形	態		最大コア長
		分	期	軟	化	状	化		cm
		期	軟	化	状	化	状		R Q D
		軟	化	状	化	状	化		[%]
30		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。	0
29		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。	0
28		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・淡黄緑～黄褐色の礫質粘土状～粘土混じり礫状を呈する。 ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。	0
27		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	26.42~27.62m ・割れ目が多い。 ・0.5~1.0cm間隔で連続して発達する。	0
26		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	26.21~26.50m ・固結礫状部からなる。 ・2~3cm間隔で発達し、割れ目がある。	0
25		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	25.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。	0
24		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	24.70~24.80m ・細砂質の礫質粘土状部からなる。 ・傾斜はN35° E77° NWである。	0
23		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	23.91~25.14m ・非常に硬軟である。 ・割れ目がやや多一部で片状化している。	0
22		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	24.70~24.80m ・細砂質の礫質粘土状部からなる。 ・傾斜はN35° E77° NWである。	0
21		花崗閃緑岩	固結	硬	細	割れ目	弱	24.70~24.80m ・細砂質の礫質粘土状部からなる。 ・傾斜はN35° E77° NWである。	0

審査資料 (平成30年11月30日)

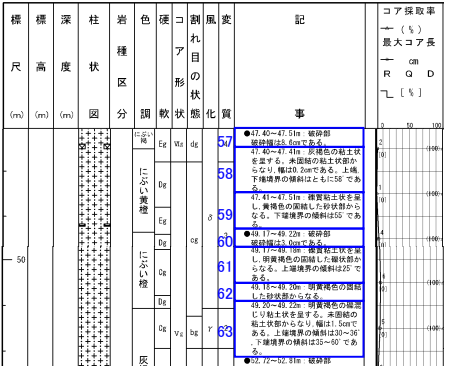
記事	
34	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
39	32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
34	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
36	●28.50~28.68m (f-b14-2-1破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主にふい黄褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.1cm ・走向・傾斜はN35° E77° NWである。
39	32.40~32.67m ・割れ目が多く、角礫状を呈する。

記事	申請書案⇒ 申請書 (H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22) ⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料 (H30.11.30)	審査資料 (H30.11.30) ⇒ 審査資料 (R2.2.7)
32.33	—	—	・割れ目の発達程度を記載。	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
34~36	変更なし	・誤記修正 (28.50~28.68m→28.50~28.66m)。 ・破砕帯名を記載。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所を累計幅を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・誤記修正(正断層センス→左ずれ正断層センス)。	・破砕帯を記載。 ・破砕部区分を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・破砕帯については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 ・粘土の細脈が分布するが、連続性や直線性に乏しいことから追記せず。	変更なし (※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)
37	—	—	・割れ目の発達程度を記載。	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
38	—	—	・割れ目の発達程度を記載。	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
39	変更なし	変更なし	・割れ目の発達程度を記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。	変更なし
40	—	—	・硬軟や割れ目の発達程度を記載。	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため追記せず。	—
41	—	—	・粘土脈を記載。	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に同方向の劣化が認められないことから追記せず。	—

設置許可申請書案	設置許可申請書 (平成27年11月)	審査資料 (平成29年12月22日)	委託報告書 (平成30年)	審査資料 (平成30年11月30日)	審査資料 (令和2年2月7日)
記事	記事	記事	記事	記事	記事
<p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の礫質粘土状を呈する。 ・灰褐色粘土：2mm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・傾斜は58°である。 ・上端境界の傾斜は58°、下端境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.20m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土：累計厚15mm ・走向・傾斜はM47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上端境界の傾斜は25°、下端境界の傾斜は23°である。</p>	<p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の礫質粘土状を呈する。 ・灰褐色粘土：2mm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・傾斜は58°である。 ・上端境界の傾斜は58°、下端境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.20m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土：累計厚15mm ・走向・傾斜はM47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上端境界の傾斜は25°、下端境界の傾斜は23°である。</p>	<p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の固結砂状部からなる。 ・灰褐色の未固結粘土状部：累計幅0.2cm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・上端境界の傾斜は58°、下端境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.22m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・主に明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ・明黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はM47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上端境界の傾斜は25°、下端境界の傾斜は23°である。</p>	<p>●47.40~47.51m 破砕部 破砕幅は50cmである。 47.40~47.51m 灰褐色の粘土状を呈する。正断層センスである。灰褐色の固結砂状部からなり、幅は0.2cmである。上端・下端境界の傾斜はともに58°である。 47.41~47.51m 礫質粘土状を呈し、黄褐色の固結した砂状部からなる。下端境界の傾斜は55°である。 ●49.17~49.22m 破砕部 破砕幅は1.5cmである。 ●49.17~49.22m 右ずれセンスである。明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ●49.17~49.22m 明黄褐色の砂混じり粘土状を呈する。未固結の粘土状部からなり、幅は1.5cmである。上端境界の傾斜は25°である。下端境界の傾斜は30~36°である。 ●49.17~49.22m 破砕部</p>	<p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に黄褐色の固結砂状部からなる。 ・灰褐色の未固結粘土状部：累計幅0.2cm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・上端境界の傾斜は58°、下端境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.22m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・主に明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ・明黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はM47° E45° Wである。 ・上端境界の傾斜は25°、下端境界の傾斜は23°である。</p>	<p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ・明黄褐色の未固結粘土状部：累計幅0.2cm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・上端境界の傾斜は58°、下端境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.22m ・破砕部である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・主に明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ・明黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はM47° E45° Wである。 ・上端境界の傾斜は25°、下端境界の傾斜は23°である。</p>



記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22) ⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
57～59	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った。断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所累計幅を記載。 ・“傾斜は58°である”との記載については、最新活動面の見かけの傾斜を示したものであり、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため削除。 	<ul style="list-style-type: none"> ・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 	<ul style="list-style-type: none"> ・記載の適正化(黄褐色→主に黄褐色)。 ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 	<ul style="list-style-type: none"> 変更なし(※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)
60～63	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> ・誤記修正(49.20m→49.22m)。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った。断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所累計幅を記載。 ・“傾斜は30°～36°である”との記載については、最新活動面の走向・傾斜を示しているため削除。 	<ul style="list-style-type: none"> ・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・下端境界の見かけの傾斜として、23°と書くべきところを誤って35～60°と記載。 	<ul style="list-style-type: none"> 審査資料(H29.12.22)と同様 ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ・誤記修正(右ずれセンス→右ずれ正断層センス、審査会合(R1.10.11)にて説明済み)。(※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)

設置許可申請書案	設置許可申請書 (平成27年11月)	審査資料 (平成29年12月22日)	委託報告書 (平成30年)	審査資料 (平成30年11月30日)	審査資料 (令和2年2月7日)																																																																							
<p>記事</p> <p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の礫質粘土状を呈する。 ・灰褐色粘土：2mm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・傾斜は58°である。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.20m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土：累計厚15mm ・走向・傾斜はN47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。</p>	<p>記事</p> <p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の礫質粘土状を呈する。 ・灰褐色粘土：2mm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・傾斜は58°である。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.20m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土：累計厚15mm ・走向・傾斜はN47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。</p>	<p>記事</p> <p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・黄褐色の固結砂状部からなる。 ・灰褐色の未固結粘土状部：累計幅0.2cm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.22m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・主に明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ・明黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はN47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>標高</th> <th>深</th> <th>柱</th> <th>岩</th> <th>色</th> <th>硬</th> <th>割</th> <th>風</th> <th>記</th> </tr> <tr> <th>尺</th> <th>高度</th> <th>状</th> <th>種</th> <th>区</th> <th>度</th> <th>れ</th> <th>化</th> <th>事</th> </tr> <tr> <th>(m)</th> <th>(m)</th> <th>(m)</th> <th>図</th> <th>分</th> <th>軟</th> <th>目</th> <th>質</th> <th></th> </tr> <tr> <th></th> <th></th> <th></th> <th>分</th> <th>類</th> <th>状</th> <th>の</th> <th></th> <th></th> </tr> <tr> <th></th> <th></th> <th></th> <th>類</th> <th>別</th> <th>態</th> <th>風</th> <th></th> <th></th> </tr> <tr> <th></th> <th></th> <th></th> <th>別</th> <th>化</th> <th>化</th> <th>化</th> <th></th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>57</td> <td>59</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>●47.40~47.51m 破砕部 破砕幅約3.0cmである。 47.40~47.51m 灰褐色の粘土状を呈する。正断層センスである。黄褐色の固結砂状部からなる。傾斜は58°である。上盤下盤境界の傾斜はともに58°である。</td> </tr> <tr> <td>60</td> <td>63</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>●49.17~49.22m 破砕部 破砕幅約1.5cmである。 49.17~49.22m 明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状部からなる。明黄褐色の未固結粘土状部を呈する。未固結の粘土状部からなる。傾斜は30°である。上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。</td> </tr> </tbody> </table>	標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	記	尺	高度	状	種	区	度	れ	化	事	(m)	(m)	(m)	図	分	軟	目	質					分	類	状	の						類	別	態	風						別	化	化	化			57	59							●47.40~47.51m 破砕部 破砕幅約3.0cmである。 47.40~47.51m 灰褐色の粘土状を呈する。正断層センスである。黄褐色の固結砂状部からなる。傾斜は58°である。上盤下盤境界の傾斜はともに58°である。	60	63							●49.17~49.22m 破砕部 破砕幅約1.5cmである。 49.17~49.22m 明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状部からなる。明黄褐色の未固結粘土状部を呈する。未固結の粘土状部からなる。傾斜は30°である。上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。	<p>記事</p> <p>●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に黄褐色の固結砂状部からなる。 ・灰褐色の未固結粘土状部：累計幅0.2cm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は55°である。</p> <p>●49.17~49.22m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・主に明黄褐色の固結礫状部及び固結砂状部からなる。 ・明黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はN47° E45° Wである。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。</p>
標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	記																																																																				
尺	高度	状	種	区	度	れ	化	事																																																																				
(m)	(m)	(m)	図	分	軟	目	質																																																																					
			分	類	状	の																																																																						
			類	別	態	風																																																																						
			別	化	化	化																																																																						
57	59							●47.40~47.51m 破砕部 破砕幅約3.0cmである。 47.40~47.51m 灰褐色の粘土状を呈する。正断層センスである。黄褐色の固結砂状部からなる。傾斜は58°である。上盤下盤境界の傾斜はともに58°である。																																																																				
60	63							●49.17~49.22m 破砕部 破砕幅約1.5cmである。 49.17~49.22m 明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり礫状部からなる。明黄褐色の未固結粘土状部を呈する。未固結の粘土状部からなる。傾斜は30°である。上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。																																																																				

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22) ⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
57～59	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った。断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所累計幅を記載。 ・“傾斜は58°である”との記載については、最新活動面の見かけの傾斜を示したものであり、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため削除。 	<ul style="list-style-type: none"> ・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 	<ul style="list-style-type: none"> ・記載の適正化(黄褐色→主に黄褐色)。 ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 	<ul style="list-style-type: none"> 変更なし(※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)
60～63	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> ・誤記修正(49.20m→49.22m)。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った。断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所累計幅を記載。 ・“傾斜は30°～36°である”との記載については、最新活動面の走向・傾斜を示しているため削除。 ・(誤記)下盤境界の見かけの傾斜として、35～60°と書くべきところを誤って23°と記載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・誤記修正(下盤境界の傾斜は23°→35～60°) 	<ul style="list-style-type: none"> 審査資料(H29.12.22)と同様 ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 ・誤記修正の反映漏れ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・誤記修正(右ずれセンス→右ずれ正断層センス、審査会合(R1.10.11)にて説明済み)。(※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)

設置許可申請書案

記事	
51	●60.26~60.69m ・破砕部である。カタクレサイトからなる。
55	・明褐色の粘土状~にぶい黄褐色~明褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・明褐色粘土：累計厚12mm ・N18° E77° W ・傾斜は18°である。 ・上盤境界の傾斜は28°、下盤境界の傾斜は27°である。

設置許可申請書
(平成27年11月)

記事	
51	●60.26~60.69m ・破砕部である。カタクレサイトからなる。
55	・明褐色の粘土状~にぶい黄褐色~明褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・明褐色粘土：累計厚12mm ・N18° E77° W ・傾斜は18°である。 ・上盤境界の傾斜は28°、下盤境界の傾斜は27°である。

審査資料
(平成29年12月22日)

記事	
51	●60.26~60.69m ・破砕部である。 ・主ににぶい黄褐色の固結礫状部、固結砂状部明及び暗灰色の固結粘土状部からなる。
55	・走向・傾斜はN18° E77° Wである。 ・上端境界の傾斜は28°、下端境界の傾斜は27°である。

委託報告書
(平成30年)

標高	深	柱状	岩	色	硬	割	風	記	コア採取率
尺	高度	状	種	区	度	れ	速	事	(%)
(m)	(m)	(m)	図	分	軟	目	化		最大コア長
			分	期	状	の	質		cm
			類	状	態	状			R
						形			Q
						状			D
						状			L
						状			[%]
	60							●60.26~60.69m: 破砕部 破砕部は50mである。 60.26~60.69m: 粘土・砂状・礫状を呈し、上層境界の傾斜は28°である。 60.57~60.59m: にぶい黄褐色の固結した砂状部からなる。明褐色の固結した粘土状部からなる。傾斜は18°である。	
								60.60~60.69m: 粘土・砂状・礫状を呈し、明褐色の固結した礫状部からなる。下盤境界の傾斜は27°である。	

審査資料
(平成30年11月30日)

記事	
51	●60.26~60.69m ・破砕部である。
55	・逆断層センスである。 ・にぶい黄褐色の固結礫状部、固結砂状部及び明褐色の固結粘土状部からなる。 ・走向・傾斜はN18° E77° Wである。 ・上端境界の傾斜は28°、下端境界の傾斜は27°である。

審査資料
(令和2年2月7日)

記事	
51	●60.26~60.69m ・破砕部である。
55	・右ずれ逆断層センスである。 ・にぶい黄褐色の固結礫状部、固結砂状部及び明褐色の固結粘土状部からなる。 ・走向・傾斜はN18° E77° Wである。 ・上端境界の傾斜は28°、下端境界の傾斜は27°である。

記事	申請書案⇒ 申請書 (H27.11)	申請書 (H27.11)⇒ 審査資料 (H29.12.22)	審査資料 (H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料 (H30.11.30)	審査資料 (H30.11.30)⇒ 審査資料 (R2.2.7)
51~55	変更なし	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合 (H29.12.22) までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩 (断層ガウジ、断層角礫、カタクレサイト) を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・“傾斜は18°である”との記載については、最新活動面の見かけの傾斜を示したものであり、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため削除。	・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分 (固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ) を併記。 ・誤記修正 (褐灰色の固結粘土状部→明褐色の固結粘土状部)。 ・固結した礫状部の色調として、にぶい黄褐色と書くべきところを誤って明褐色と記載。 ・下端境界の見かけの傾斜として、27°と書くべきところを誤って37°と記載。	・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととして追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。	・誤記修正 (逆断層センス→右ずれ逆断層センス、審査会合 (R1.10.11) にて説明済み)。 (※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)

設置許可申請書案

記事	
51	<ul style="list-style-type: none"> ●60.26~60.69m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる。 ・明褐色の粘土状~にぶい黄褐色~明褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・明褐色粘土：累計厚12mm ・N18° E77° W ・傾斜は18°である。 ・上盤境界の傾斜は28°，下盤境界の傾斜は27°である。
55	

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
51	<ul style="list-style-type: none"> ●60.26~60.69m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる。 ・明褐色の粘土状~にぶい黄褐色~明褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・明褐色粘土：累計厚12mm ・N18° E77° W ・傾斜は18°である。 ・上盤境界の傾斜は28°，下盤境界の傾斜は27°である。
55	

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
51	<ul style="list-style-type: none"> ●60.26~60.69m ・破砕部である。 ・主ににぶい黄褐色の固結礫状部、固結砂状部及び明褐色の固結粘土状部からなる。 ・走向・傾斜はN18° E77° Wである。 ・上盤境界の傾斜は28°，下盤境界の傾斜は27°である。
55	

委託報告書 (平成30年)

標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	記	コア採取率
尺	高度	状	種	区	軟	れ	化	事	(%)
(m)	(m)	図	分	軟	目	状	質		最大コア長
		分	類	状	の	化			cm
		類	別	状	形	質			R Q D
		別	状	化	状	質			L [%]
	60							●60.26~60.69m：破砕部 破砕部は50mである。	0
								60.24~60.69m：粘土・砂混じり 礫状を呈しにぶい黄褐色の固結 した礫状部からなる。上盤境界 の傾斜は18°である。	0
								60.57~60.59m：にぶい黄褐色の 固結した砂状部からなる。 明褐色の固結した粘土状部 からなる。傾斜は18°である。	0
								60.60~60.69m：粘土・砂混じり 礫状を呈し、明褐色の固結した 礫状部からなる。下盤境界の傾 斜は27°である。	0

審査資料 (平成30年11月30日)

記事	
51	<ul style="list-style-type: none"> ●60.26~60.69m ・破砕部である。 ・逆断層センスである。 ・にぶい黄褐色の固結礫状部、固結砂状部及び明褐色の固結粘土状部からなる。 ・走向・傾斜はN18° E77° Wである。 ・上盤境界の傾斜は28°，下盤境界の傾斜は27°である。
55	

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
51	<ul style="list-style-type: none"> ●60.26~60.69m ・破砕部である。 ・右ずれ逆断層センスである。 ・にぶい黄褐色の固結礫状部、固結砂状部及び明褐色の固結粘土状部からなる。 ・走向・傾斜はN18° E77° Wである。 ・上盤境界の傾斜は28°，下盤境界の傾斜は27°である。
55	

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
51~55	(誤記)下端境界の見かけの傾斜として、37°と書くべきところを誤って27°と記載。	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・“傾斜は18°である”との記載については、最新活動面の見かけの傾斜を示したものであり、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため削除。	・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・誤記修正(褐色の固結粘土状部→明褐色の固結粘土状部)。 ・固結した礫状部の色調として、にぶい黄褐色と書くべきところを誤って明褐色と記載。 ・誤記修正(下端境界の傾斜は27° →37°)	・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため追記せず。 ・誤記修正の反映漏れ。	・誤記修正(逆断層センス→右ずれ逆断層センス、審査会合(R1.10.11)にて説明済み)。(※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)

H27-B-2

設置許可申請書案

記事	
137	●154.53~154.71m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・褐灰～灰赤色の粘土状～明緑灰～緑灰～灰褐色の礫質粘土状～にぶい橙～明緑灰色の粘土混じり礫状を呈する。
140	・褐灰～灰赤色粘土：累計厚5mm ・傾斜は36°である。 ・上端境界の傾斜は65°～80°である。
141	157.89～160.00m ・割れ目沿いの緑泥石化が著しい。

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事	
137	●154.53~154.71m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・褐灰～灰赤色の粘土状～明緑灰～緑灰～灰褐色の礫質粘土状～にぶい橙～明緑灰色の粘土混じり礫状を呈する。
140	・褐灰～灰赤色粘土：累計厚5mm ・傾斜は36°である。 ・上端境界の傾斜は65°～80°である。
141	157.89～160.00m ・割れ目沿いの緑泥石化が著しい。

審査資料 (平成29年12月22日)

記事	
137	●154.53~154.71m(f-b-2-22破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。 ・灰赤色の未固結粘土状部：累計幅0.5cm
140	・走向・傾斜はN42° E75° Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。
141	157.89～160.00m ・割れ目沿いの緑泥石化が著しい。

委託報告書 (平成30年)

標高	深	柱	岩	色	硬	割	風	変	記	コア採取率
尺	高度	状	種	目	度	れ	化	質	事	(%)
(m)	(m)	図	分	別	別	目	状	化		最大コア長
		分	類	状	状	別	態			cm
		類	別	化	別	別				R Q D
										L [%]
			岩						●154.53~154.71m: 破砕帯(f-b-2-22) 破砕幅は15.7cmである。 正断層センスである。主に灰褐色の固結礫状部からなる。灰赤色の未固結粘土状部からなり、幅0.5cmである。傾斜は36°である。	0
									154.53~154.71m: 緑泥石化が著しい。傾斜は36°である。上端境界の傾斜は65°～80°である。	0
									157.89~160.00m: 割れ目沿いの緑泥石化が著しい。	0

審査資料 (平成30年11月30日)

記事	
137	●154.53~154.71m(f-b-2-22破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。 ・灰赤色の未固結粘土状部：累計幅0.5cm
140	・走向・傾斜はN42° E75° Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。
141	157.89～160.00m ・割れ目沿いの緑泥石化が著しい。

審査資料 (令和2年2月7日)

記事	
137	●154.53~154.71m(f-b-2-22破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。 ・灰赤色の未固結粘土状部：累計幅0.5cm
140	・走向・傾斜はN42° E75° Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。
141	157.89～160.00m ・割れ目沿いの緑泥石化が著しい。

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
137～140	変更なし	・破砕帯名を記載。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所の累計幅を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・“傾斜は36°である”との記載については、最新活動面の見かけの傾斜を示したものであり、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため削除。	・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・下端境界の見かけの傾斜として、65～80°と書くべきところを誤って65～70°と記載。 ・固結した礫状部の色調として、灰褐色と書くべきところを誤って緑灰色と記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・未固結粘土状部の見かけの傾斜に記載については、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため追記せず。	変更なし (※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)
141	変更なし	変更なし	・割れ目について記載(割れ目沿いの変色)。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・155.00～160.00m区間のうち、特に緑灰色が顕著な区間について記載。	変更なし
142	—	—	・割れ目について記載(鉤物脈)。	・鉤物脈については、補足的なものであるため追記せず。	—

設置許可申請書案

記事
<p>●154.53～154.71m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・褐灰～灰赤色の粘土状～明緑灰～緑灰～灰褐色の硬質粘土状～にぶい橙～明緑灰色の粘土混じり礫状を呈する。 ・褐灰～灰赤色粘土：累計厚5mm ・傾斜は36°である。 ・上端境界の傾斜は65°、下端境界の傾斜は65°～80°である。</p>
157.89～160.00m ・割れ目治いの緑泥石化が著しい。

設置許可申請書 (平成27年11月)

記事
<p>●154.53～154.71m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・褐灰～灰赤色の粘土状～明緑灰～緑灰～灰褐色の硬質粘土状～にぶい橙～明緑灰色の粘土混じり礫状を呈する。 ・褐灰～灰赤色粘土：累計厚5mm ・傾斜は36°である。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。</p>
157.89～160.00m ・割れ目治いの緑泥石化が著しい。

審査資料 (平成29年12月22日)

記事
<p>●154.53～154.71m(f-b-2-22破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。 ・灰赤色の未固結粘土状部；累計幅0.5cm ・走向・傾斜はN42°E75°Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。</p>
157.89～160.00m ・割れ目治いの緑泥石化が著しい。

委託報告書 (平成30年)

標高	深度	柱状	岩種	色	硬	割れ	風	変	記事
尺	高度	状	区	目	質	目	化		
(m)	(m)	図	分	状	状	目	質		
		Da		灰褐色	固結				●154.53～154.71m: 破砕帯(f-b-2-22) 破砕部は15.7cmである。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。単灰色の固結した礫状部からなる。上端境界の傾斜は63°である。 ・灰赤色の未固結粘土状部；累計幅0.5cm ・走向・傾斜はN42°E75°Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。
		Da		緑灰	未固結				154.53～154.71m: 緑泥石化が著しい。 ・傾斜は36°である。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。
		Da		緑灰	未固結				157.89～160.00m ・割れ目治いの緑泥石化が著しい。

審査資料 (平成30年11月30日)

記事
<p>●154.53～154.71m(f-b-2-22破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。 ・灰赤色の未固結粘土状部；累計幅0.5cm ・走向・傾斜はN42°E75°Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。</p>
157.89～160.00m ・割れ目治いの緑泥石化が著しい。

審査資料 (令和2年2月7日)

記事
<p>●154.53～154.71m(f-b-2-22破砕帯) ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に灰褐色の固結礫状部からなる。 ・灰赤色の未固結粘土状部；累計幅0.5cm ・走向・傾斜はN42°E75°Eである。 ・上端境界の傾斜は63°、下端境界の傾斜は65°～80°である。</p>
157.89～160.00m ・割れ目治いの緑泥石化が著しい。

記事	申請書案⇒ 申請書(H27.11)	申請書(H27.11)⇒ 審査資料(H29.12.22)	審査資料(H29.12.22)⇒ 報告書	報告書⇒ 審査資料(H30.11.30)	審査資料(H30.11.30)⇒ 審査資料(R2.2.7)
137～140	(誤記)下端境界の見かけの傾斜として65°～70°と書くべきところを誤って65°～80°と記載。	・破砕帯名を記載。 ・性状及び色調については、申請書提出から審査会合(H29.12.22)までの間に行った、断層岩区分を目的とした再観察の結果に基づき記載。肉眼観察で確認した原岩組織の残留の程度、連続性、硬軟に基づき、断層岩(断層ガウジ、断層角礫、カタクレーサイト)を判断。断層ガウジを未固結粘土状部、断層角礫を未固結礫状部、カタクレーサイトを性状に応じて、固結礫状・砂状・粘土状部と記載。 ・上記再観察で未固結粘土状部とした箇所累計幅を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・“傾斜は36°である”との記載については、最新活動面の見かけの傾斜を示したものであり、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため削除。	・破砕幅を記載。 ・破砕部区間を性状毎に深度を分けて記載。 ・性状については、観察結果と審査資料での断層岩区分(固結・未固結と礫状・砂状・粘土状の組合せ)を併記。 ・誤記修正(下端境界の傾斜は65°～80°→65°～70°) ・固結した礫状部の色調として、灰褐色と書くべきところを誤って緑灰色と記載。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・破砕幅については、性状一覧表に示しており、柱状図には記載しないこととしているため追記せず。 ・未固結粘土状部の見かけの傾斜については、最新活動面の走向・傾斜を別途示しているため追記せず。 ・誤記修正の反映漏れ。	変更なし (※ただし、断層岩区分は薄片観察結果に基づく)
141	変更なし	変更なし	・割れ目について記載(割れ目治いの変色)。	審査資料(H29.12.22)と同様 ・155.00～160.00m区間のうち、特に緑灰色が顕著な区間について記載。	変更なし
142	—	—	・割れ目について記載(鉾物脈)。	・鉾物脈については、補足的なものであるため追記せず。	—

余白